



## 本日はよくお参り下さいました

今年は例年にないほどの温かいお正月でした。お参りの方も多く、いつも節分まで残っている破魔矢が全て出てしまいました。ここ最近では気温の低い日が続くようになりました。今この文章を書いている1月29日現在も雪に変わりそうな冷たい雨が降っています。受験シーズン真っ只中の今、受験合格はもちろんですが、風邪をひかないこと、大雪が降らないことも切実な願いです。さて、二月は節分、立春とまさに季節の分かれ目です。立春が一年の始まりという考え方があり、一年の終わりである節分に全国各地で豆まきが行われます。鬼は災厄の象徴で、鬼を追い払う=厄を払うという意味から節分は厄払いの日でもあります。厄除のご祈祷はこの日までにを行うのが良いとされています。昔、ある先生が「ただ良い成績を下さいと言われても、良い成績をあげるわけにはいかない。勉強を頑張った結果が素晴らしいからよい成績を差し上げるのです。神様も同じで、あなたたちが幸せになりたいと願うから幸せにして下さるわけではないのです。神様が幸せにしたいと思われるような生き方をして下さい。』というお話をされました。自分本位の心をいかに抑えるかということだと思います。最近の事件やニュースを見ても他への配慮や、誠実に生きることの大切さを改めて感じます。一人一人が心豊かに暮らせる世の中になりますように。今月も皆さまのご健康とご多幸を、心よりお祈り申し上げます。権禰宜 道子



習わしなのを。

## 2月

**1日・15日 月次祭(つきなみさい)** 皇室の永遠と国家の発展、氏子・崇敬者並びに社会の安定と平和を祈ります。

**3日 節分** 節分は古くから大晦日に宮中で行われていた旧年の厄や災難をはらい清める儀式。鬼打ちをする追儺(ついな)の起源は奈良時代、706年文武天皇の御代に諸国に流行した悪疫を鬼に見立てたことで、民間に広まったのは江戸時代からと言われています。

### 4日 立春(りっしゅん)

決まり事や季節の節目の起点となる日。八十八夜、二百十日も立春から数えます。

**6日 初午(はつうま)** 全国に約三万社ある稲荷神社の総本社である、京都の伏見稲荷大社のご鎮座記念日です。



**11日 建国記念の日** 神武天皇が橿原宮で即位された古を偲び、戦前の祝日であった、建国創業の御神徳を景仰する紀元節(きげんせつ)がもととなり定められた日。奈良県橿原市に鎮座する橿原神宮(かしはらじんぐう)をはじめ全国の神社で行われます。

**19日 雨水(うすい)** 雪が雨や水に変わる頃。しかし大雪が降ることも。三寒四温を繰り返しながら、春に向かっていきます。

### 20日 久里浜天神社祈年祭・初午祭

今年一年の国家の安泰、地域の繁栄、氏子崇敬者の家内安全・家族健康、また五穀豊穡を祈るおまつりです。初午祭は境内の稲荷社の前にて行われます。(氏子会役員が参列します。)

## 天神さまの豆知識

―厄除けの神様―  
久里浜天神社では、年明けから厄除けの御祈願が大変多くあります。学問の神様として有名な菅原道真公が、何故厄除けの神さまであるのか、ご説明いたします。

●**災厄を晴らす神** 菅原道真公(菅公)は罪なくして都を追われ、望郷の思いも空しく大宰府では、衣食もままならぬ厳しい生活を強いられ、病苦に悩みながらも、皇室のご安泰と国家の平安、また自身の潔白をひたすら天にお祈りされ、誠を尽くされました。菅公は、九〇三年に大宰府で亡くなりましたが、その直後、京では雷鳴がとどろき、大地が揺れ動く天災が発生したり、洪水疫病などが相次ぎます。また六年後には菅公を失脚させた者や関係する人が次々に亡くなりました。この事態を見過ごすことができなくなった朝廷では道真公の無実が証明され、火雷神、天満自在天神という神号が贈られました。祟り神として恐れられた天神様は、やがて「災厄を晴らす神」として信仰されるようになりました。ちなみに相殿に鎮座する素戔嗚尊(すさのおのみこと)様も厄除けの神さまとして崇められています。

節分は災難や厄を祓い清める儀式です。開運を願う天災を免れるよう厄除祈願をする

ことは日本古来の習わしなのを。



## お祭り歳時記

初午祭(二月六日)

※久里浜天神社では、二月二〇日に祈年祭とあわせて行います。

二月初の午の日を「初午(はつうま)」といひ全国津々浦々のお稲荷さんで初午祭が行われます。お稲荷さんの総本社である、京都の伏見稲荷大社のご祭神が、奈良時代の和銅四年(七一二年)の二月の初午の日に山城国紀伊郡(いまのくにきいのこおり)の伊奈利山の三ヶ峰にご鎮座された日に、ちなんでいます。伊奈利とは稲生いねなりの転じた語で、衣食住を司る神として一三〇〇年以上前から、信仰を集めています。



## 今月の言葉

『人は巧みにして偽らんよりは拙うしても誠あるに如かず』  
ひと たく いっわ  
つたの まこと

(編者未詳「曾我物語」より)



何事にも有能で巧みだが、偽りばかりを表に出す人物よりも、何事にも拙くあっても、誠意のある人物を人は好むだろう。ごまかしばかりをする人は他者からの信頼を得られない。ごまかしは、ばれていくものである。偽りだらけの信用できない相手に、腹に一物無しで好んで協力する者はいない。他者からの手助けや協力は、信頼を持たれなければ得られない。参考文献『神道のことば』武光誠監修 河出書房新社